

# 朝鮮が再現した「満洲」

——『東亜日報』新聞記事と金東仁「赤い山」——ある医師の手記——

柳 水晶

## 一、はじめに

金東仁「赤い山」——ある医師の手記<sup>①</sup>——（以下、「赤い山」と略して表記）は韓国的高等学校『文学』教科書に載っている韓国の代表的な短編小説として知られている。一九三二年四月大衆雑誌『三千里』第三七号に発表され、後に『金東仁短篇選』〔博文館、一九三九年〕に収められた。内容をまとめると左のようである。

「満洲」における疾病調査のために一年間「満洲」を旅行していた医師の「余」は朝鮮人小作人たちの村にたどり着く。そこには「山猫」というあだ名で呼ばれる流れ者がいて、村人たちの警戒の対象であった。「山猫」は顔立ちから振る舞いまですべてが他人の憎しみを買い、近づけない人物であり、村人たちは彼に怯えて彼の要求に応じながらも陰では罵っている。ある日、「満洲国人」の地主にその年の小作料を払いに行った宋兪知が屍骸になって戻り、「余」は宋兪知を検死する。「余」は帰り道に「山猫」に会って、宋兪知の死を伝えて、その晩、異

郷の地で虐待を受ける同族の悲しみで眠れない。翌朝、「余」は村人たちから「山猫」が村の入り口で死んでいるという知らせを聞いて行ってみると、「山猫」は息も絶え終えになり、自分が地主のところに行つたことを話し、うすれ行く意識の中で白い衣と赤い山が見えるとおぼやく。そして彼は「東海の水と白頭山が」の歌を歌ってほしいという言葉で「余」に残して死んでいく。「余」と村人たちの厳粛な歌声が「満洲」平野に響き渡るといふ場面で小説が終わる。

ここで、「中学生のための読書指導要領」を参考にすると、「赤い山」の「理解と鑑賞」のポイントについて少し長くなるが引用しておこう。それによると、

民族主義的抵抗の精神を表した作品で、作家の小説的傾向とは多少異なる。この作品で山猫は故国を離れて流浪する我が民族を象徴し、宋兪知の死は満洲に流れて住んでいる我が同胞の悲劇を象徴する。山猫は、心の中でだけ憤慨する白衣民族の無気力さを切り抜けて、満洲人に向けて復讐を企てる人物であり、彼の臨終時の言葉で「赤い山」「白

「白衣」は我が国土と我が民族を表しているもので、祖国に対する愛情と郷愁を描いている。

となっている。それに、小説の類型も「短編小説、民族主義小説、入れ子構造小説」と分類されていて、本稿の筆者も十数年前にこのような指導を受けてこの小説を接した経験がある。また、作中人物「山猫」が物語の後半部に劇的性格の変化を見せているところを強調して、「感傷的な側面」が強い作品と指摘されている。先行研究でも、まさに右の「指導要領」を導き出したような見解となる「赤い山」では、観察的語り手「余」が登場し、実験的次元の民族性を確認する事件を多少感傷的に報告している」と捉えられる場合が多い。

金東仁（一九〇〇—一九五一年）は一九一九年韓国最初の文学同人雑誌『創造』を発刊し、簡潔で現代的な文体で創作活動が続けて、韓国の「言文一致」を確立した作家として知られている。父は基督教長老で平壤の富豪だったため、裕福な生活を送り、一九一四年から三年余り、一九一七年には半年と二回の日本留学の経歴もある。李光洙の啓蒙主義的な傾向に對抗して写実主義の手法を使用しながら、一九二〇年代半ば頃に流行った新傾向主義及びプロレタリア文学にも対抗して芸術至上主義を標榜し、純文学運動を展開した作家として位置づけられている。前にあげた「読書指導要領」でいう「作家の小説的傾向」もこのような金東仁の「写実主義」「芸術至上主義」の傾向を指しているであろう。しかし、「芸術至上主義作家」といわれている金東仁が、どうして「愛国歌」や「赤い山」「白い衣」

など一見民族主義色を露骨に出した、きわめて政治的なテクスト「赤い山」を書いたのかを疑う必要があるだろう。そこで、最近の先行研究をその側面から見ると、語り手「余」の制限的視点、つまり一人称語り手の視点の限界を取り上げて、物語の後半部は「山猫」の性格が変わったというより、「山猫」に対する語り手の解釈が変わったとみる傾向が強い。これについての本稿なりの考察は次節で行うことにする。

しかし、本稿が主要な課題とするのはその点ではなく、今までの先行研究が看過してきたところに求めようと思う。それは作品内部や作家の問題ではなく、「赤い山」が発表された一九三二年という時代背景と小説の関連である。もちろん、その時期が朝鮮の日本植民地期であった事実は作品世界にも間接的に出ているし、それを無視した研究や感想はなく、それゆえにこそ民族主義傾向の強い小説として読まれてきたわけである。ただ、その政治的・社会的背景に対する認識があまりにも大雑把で漠然としているため、具体性に欠けていることは否定できない。本稿以前にあっても、鄭惠英はこのような研究状況を指摘し、実際一九三一年七月に長春郊外で起った万宝山事件を取り上げ、本作品の背景に据えながら、現実状況と作品世界とのズレを作家の「現実認識のなさ」と指摘している。しかし、本稿では金東仁が現実には無自覚であったというより、ある意味では極めて忠実に現実を捉えて、敏感に反応し、それを作品に反映していたという立場をとる。いうまでもなく、それは自覚と無自覚の両方を含む意味としてである。それだけではなく、「赤い山」はあくまでも作家金東仁の文学的・芸術的営為であるこ

とも常に念頭におかなければならないと思う。

では、なぜ一九三二年なのか。「赤い山」が発表された一九三三年四月は、満洲事変を経て中国東北地方に「満洲国」が建国（一九三二年三月）された直後である。本作品が掲載された『三千里』第三七号は一方で「満洲国」建国を記念して「新満洲国と吾人の態度」という特集が組まれるなど、特大号で出されている。まさに「満洲」という地に世間の関心が集められた時期で、その関心は決して一時的なものではなく「満洲国」の建国以前から既に始まっていた。金東仁の「赤い山」もその時代状況の所産の一つといえるのであれば、現実を反映していないはずはないと捉えるほうが妥当であろう。

以上の本稿の認識を踏まえて、まず、「赤い山」に描かれた「満洲」を取り出し、その表象性を考察する。その考察の手続きとして、まず、テキスト内で「満洲」を認識し、描写している主体である語り手「余」を位置づける作業が必要である。そのうえに立つて、「赤い山」のなかの「満洲」が形成されるまでの時代状況、執筆・発表時期、もしくはそれ以前に遡って、朝鮮で「満洲」に対する〈関心〉がどの種の問題にどのように表れて流通したかを具体的な新聞言説と照らし合わせながら、確認する。それによって、作家が意図した、または意図していなかったが結果的に描いてしまった作品世界、「満洲」が浮かび上がってくることを期待する。

## 二、「ある医師の手記」

この小説には「——ある医師の手記——」という副題が付いている。ではなぜ、「医師」が書く「手記」ということをこの小説テキストの前面に出す必要があったのか。本稿がそこに着目するのは、その「医師」という存在が、本稿における、語り手「余」を位置づける作業にとって大きな意味を持つと考えられるからである。そこで始めに、その理由と効果を検討しよう。

### （一）「医師」という職業

「余」の職業とテキストとの関係を見てみよう。まず、「余」は「満洲」の「病気をすこし調査する」ために一年間リサーチ旅行をしているという設定になっている。つまり、医師という職業こそが「余」が「満洲」の隅々を歩き回って、やがて物語の舞台になる「朝鮮人村」に辿り着くきっかけを与えることになっている。そして、医師であるゆえに「宋僉知」や「山猫」の死に積極的に関わらざるを得なくなる。しかも、医師のまなざしという点に作者は自覚的であって、「山猫」を「村にとつては大きな癌腫」と描写するところにも医師らしい言葉選びが見てとれる。

しかし、医師という職業はただ物語の展開にだけ関わる問題ではない。作品の外部のコンテキストを参照する必要がある。医療関係者は過去にもあったが、彼らは近代国家の形成に伴って、医師免許制度という形で国家権力から権威を与えられていく一方で、国家の制度的枠組に取り込まれていったことを

想起すると、さらに大きな問題に繋がるはずであろう。韓国では、一九〇八年アメリカ長老会宣教師系のセブランス医学学校の卒業生七人に与えられた医師開業免許状が最初である。その後は朝鮮総督府によって医師免許制度が整えられ、それまで「医士」と総称された医療関係者は、西洋医学を施術するものは「医師」、在来医学を施術するものは「医生」と区別し、日本「内地」と同じく、伝統医学を排除して西洋の近代医学を中心に医療制度を確立する政策が展開される。この「医師」という職業が、朝鮮植民地期、日本帝国の植民地政策に組み込まれていったのである。すると、「余」の「満洲」旅行が日本帝国主義と深く結びついていることは注意しておく必要がある。

「赤い山」に登場する「余」がどのような経路で医師になったのかは確かではないが、西洋の近代医学を学んだことは彼の言動から推測できる。したがって、韓国の植民地近代化の過程で誕生した医師という職業の「余」は、また日本帝国の政策によって強力に推進された「新国家」の胎動期に「満洲国」で活躍したことになる。

(2) 「科学的」「客観的」「理性的」なまなざしが持つ権威  
「余」が「山猫」から「先生」と呼ばれているのを見れば、他の村人たちからも先生と呼ばれていたと想定できる。乱暴で傍若無人な「山猫」でさえ「余」には敬意を払い、「先生」と呼んでいた。それも「余」の「医師」という職業に起因するところが大きいと考えられる。近代の医学教育を受け、科学的で理性的な精神を徹底させていると信じられた「余」はまさに近

代的エリートであり、それは「余」が百姓の村人たちからは距離をおいたスタンスで自分を認識することからも同じく見える。

地団駄を踏んだ。叫びわめいた。虐待を受ける者の苦しみを訴えながら泣いた。しかし——それだけであつた。他人のことで地主に反抗して、自分の飯のたねまで取りあげられてしまうことを恐れてか、勇敢に先に立っていく者はいなかった。(九五頁)

故郷を離れた万里の異境で、虐待を受けるひとびとのあわれさを思い、その晩は余も寝つかれなかった。

その悲憤を訴えるところもまたない、われわれの境遇を思つて、余も涙を禁じえなかった(九七頁、傍線は引用者による。以下同様)

最初の引用で「余」は、同じ民族でありながらも自分とはまるで「虐待を受ける人」とはまったく異なる傍観者のような態度で、冷静に彼らを眺めている。エリート意識がそうさせるのであろうか。その次の引用文では「われわれ」という言葉は使っているものの、「余」が感じている感情は、傍線部を見るとあくまでも「虐待を受けるひとびと」に対する距離をおいた同情心である。「余」自身はその「ひとびと」には入っていないのである。村の成員ではなく、たまたま一時的に滞在している旅行者であることを考えれば、当たり前かもしれない。しかし、

このような「余」の姿勢と権威は作品内部の人物にだけではなく、作品を超えてこのテクストの読者にまで影響力を持つことは見逃せない。なぜなら、「余」は作中の語り手でもあって、読者は「余」の冷静なまなざしを通じて「理性的」で「客観的」な情報を信じるようになる仕組みになっているからである。

「ある医師の手記——」という副題は、このテクストが虚構の小説であり、主観的・制限的視点の制約がある一人称小説であるにも関わらず、読者に最初から「科学」と「事実」と「客観」という価値を前提として読まれることを期待した枠付であるといえる。しかし、このような「科学的」「客観的」「理性的」まなざしの権威そのものが、新しい情報、つまり「山猫」の意外な行動と死によって転覆されることになることに作品としての驚きの効果をみせるわけである。またそこに、民族における非知的な感情がテクストの基層から湧きよがってくることも確かだといえる。

右に論じたような語り手の問題は次の二つの先行研究でも論じられているので、それらを批判的に概観してみよう。それらの論文では主に、「山猫」と「余」の人物像とその叙述方法、プロットの進行に着目して、語り手の視点と〈解釈〉の問題を論じたものである。またいずれも「山猫」の人物像が「悪」から「善」へと転換したことに注目している。

まず、李大探「金東仁の短編小説『ジャガイモ』『赤い山』の解釈」(一九九一年)では「主動人物『山猫』は」解説者「Ⅱ語り手『余』が直接観察し、推理したこととは関係なく、村人たちの話によるものに関連する。イックホ(Ⅱ『山猫』

の行動を解説者が直接観察するのは作品の後半部に現れる「三七頁」と指摘し、「山猫」が臨終の時に祖国「赤い山」と同胞「白い衣」を懐かしみながら、「愛国歌」を歌ってほしいと頼んだのは「山猫」の知られざる過去が朝鮮の独立運動と関係があったと推測している。この論文における「山猫」の過去に対する真偽確認はさておいて、要するに、医師であるゆえ「客観的」で「正確」であろうと期待される語り手「余」の視線がむしろ「制限的」で「主観的」であったという見解に注目される。ただ惜しいのは、李はそれによって「作品には意味の多様な解釈が可能になる広い空白ができる。その意味の空白こそ作家のメッセージが潜んでいる」(二四六頁)という作者還元的な結論にとどまっていることである。

次に、金九中「読書を通じるテクストの転覆——金東仁「赤い山」「礎石」を中心に」(一九九八年)でも、作中の語り手「Ⅱ「余」」の役割変化は時空間の距離による情報不在を解消するために必然的に生じると述べて、「作中語り手は読者の読書遂行中、誤読を促すために内包した作者の意図である」(二二頁)と主張する。それによって、「読書行為に伴う期待の地平は誤読を形成し、誤読の転覆が期待の地平を修正するという読書行為の方向と逆方向によって新しい読書能力が生成されるのである」(二八頁)と結論づける。金九中はせっかく、作品批評を越えて、読者にまで目が届いた論といつてよいが、あくまでも「読書行為」という「普遍的」で、非歴史的な行為に広げて、一般化してしまったことがこれまた惜しまれる。

前節でも述べたように、本稿は一九三二年の朝鮮社会で広く

流通していた情報が作家という個人の認識の中で構造化され、「小説」という形式で表象されたと捉える。それに、第一次的に想定される読者もまた一九三二年を生きる人々であった。本稿はこのテキストと読者の同時代性に注意を払いながら、歴史的な具体性において本作品を読み直すことを試みるものである。つまり、「科学的」「客観的」「理性的」なまなざしが「限定」してしまったところに目を向けようと思う。

### (3) 「文明の洗礼」を受けたまなざし

本稿の試みにとって重要な箇所として、次の引用文があげられる。それは「赤い山」の冒頭である。

それは余が満州を旅行したときのことであつた。満州の風俗もすこし探りたかつたし、いまなお文明の洗礼を受けていないかれらのあいだにはびこっている病気をすこし調査することもかねて、一年の期限をあらかじめ設けて、満州をくまなく歩いてまわつてきたことがあつた。そのときにXX村というちいさな村で見たことをここに書き記してみようと思う。(八七頁)

これはこの引用以後に展開される過去の物語を回顧しながら、作者の現在の時点で語られたものである。傍線部では中国東北部、つまり「満洲」を「文明」のない野蛮・未開な地と見ている語り手のまなざしが窺えるだけではなく、より重要な点は「文明」のない「満洲」に対して、「余」はいかにも「近代文

明」と「科学」の側に立っているような語りをしている、そのまなざしは彼の「医師」という職業によって裏付けられるという構造を装っていることである。このような「余」のまなざしは作品世界のすべてにおいて向けられ、読者はこの偏向性を帯びたまなざしを通じて作品世界と人物に接することができるのである。

韓国文学史から見れば、近代小説がいまだ完全に定着していない時期であつたことを考えると、このような偏向性が強いまなざしをもつ語り手を設定したことは破格な試みとして評価される。この作品を読むということは、テキストと時代の関連を媒介する語り手の得意なまなざしを理解することを前提としなければならぬと考える。

それでは、このまなざしを通して描写された作品世界はどのようなものであつたか、本稿ではとりわけ、物語の舞台になっている「満洲」について考察してみたいと思う。

### 三、「赤い山」からみる「満洲」

以下、論述の便宜上から、テキストから「満洲」に関連する箇所を取り出して、あらかじめ表としてまとめると、左のようになる。

テキスト引用

「満州」関連箇所

【引用1】 八七頁

それは余が満州を旅行したときのことであった。満州の風俗もすこし探りたかったし、いまなお文明の洗礼を受けていないかれらのあいだにはびこっている病気をすこし調査することもかねて、1年の期限をあらかじめ設けて、満州をくまなく歩いてまわってきたことがあった。そのときにXX村というちいさな村で見たことをここに書き記してみようと思う。

【引用2】 八七頁

XX村は、朝鮮人小作人だけが住んでいる約20戸あまりのちいさな村であった。四面を見まわしても、山ひとつ見あたらない広漠とした満州の平野のまんなかにある、名もないちいさな村であった。

【引用3】 八七頁

蒙古人の従者をひとりしたがえて、らばにまたがつて満州の村々を歩きまわっていた余が、そのXX村にいたった時は、秋もすっかり過ぎ、いつしか狂暴な北国の冬が満州を訪れた頃であった。

【引用4】 八七頁

満州のどこにも朝鮮人のいないところはないが、こんな奥地でひとつの村全体が、みな朝鮮人だけでできているところに出会わして、とてもなつかしかった。  
〔中略〕殺風景な満州、そのなかで殺風景なくらしをしている満州国人や朝鮮人の村々を、ほぼ1年近くも歩きまわって、〔後略〕

【引用5】 九五頁

宋兪知という老人が、その年の収穫をロバに積んで、満州国人の地主のいる村にいった。しかし帰りには死骸になっていた。できがよくないというので殴打され、骨をへし折られた宋兪知は、ロバの背にからだをくくりつけられて、ようやくXX村に帰りついたのであった。

【引用6】 九七頁

故郷を離れた万里の異境で、虐待を受けるひとびとのあわれさを思い、その晩は余も寝つかれなかった。  
その悲憤を訴えるところもまたない、われわれの境遇を思つて、余も涙を禁じえなかった。

①「満州」を「旅行」する

②「満州」の「風俗」を「探」る

③まだ「文明の洗礼」を受けていない「かれら」

④「かれら」の間にはびこっている「病氣」

⑤「病氣」を「調査」する

⑥「1年の期限」を「設け」る

⑦「満州」を「くまなく」「歩いてまわ」る

⑧朝鮮人小作人だけが住んでいる約20戸あまりのちいさな村

⑨四面を見まわしての、山ひとつ見あたらない広漠とした「満州」の平野

⑩蒙古人の従者

⑪狂暴な北国の冬

⑫「満州」のどこにも朝鮮人のいないところはない

⑬みな朝鮮人だけでできているところ

⑭殺風景な「満州」そのなかで殺風景なくらしをしている「満州国人」や朝鮮人

⑮宋兪知という老人が、その年の収穫をロバに積んで

⑯「満州国人」の地主

⑰帰りには死骸になっていた

⑱できがよくないというので殴打され、骨をへし折られた

⑲故郷を離れた万里の異郷

⑳虐待を受けるひとびと

以下、この表を踏まえる形で、語り手が捉えた「満洲」とその描写がどのような文脈のなかで〈解釈〉できて、どのような問題が提起できるかを考察する。

### (1) 「満洲」の〈風土〉——自然と文化

この小説の冒頭部をみると、テキストは一種の紀行文の形式をとっている。それと同時に、物語の空間的背景になる「満洲」に対する記述もまた主に小説の冒頭部に集中していることが右の表を見ただけでもすぐ分かる。「満洲」の自然を描写した個所で特徴的な表現を挙げるとすれば、表の⑨⑩⑪になるだろう。

多くの旅行記がそうであるように、「満洲」を語るとき、その自然や気候などいわゆる〈風土〉の描写は欠かせない。しかし、語り手が眺めた「満洲」には「客観的描写」とは言い難いところがある。たとえば、「北国の冬」の寒さや厳しさの強調と「広漠」とした「平野」は、ただいかにもそこでは人が暮らしにくいかを伝えるだけではなく、まるで人が住んでいないかのような印象を与える機能をも果たしている。そして、それは【引用4】の傍線部「殺風景な満洲、そのなかで殺風景なくらしをしている満州国人や朝鮮人の村々」で確認できるように、「殺風景」ということばで集約的に表れる。まず、その描写に注意しておきたい。

このような描写は「満洲」の自然に対することに止まらず、その文化に関する記述にも一貫して見られる。その端的な例が【引用1】の傍線部「満洲の風俗もすこし探りたかったし、い

まなお文明の洗礼を受けていないかれら」に出ている。ここでは、はつきり「満洲」には「文明」がまだないと断言しながらも、「風俗」を探る目的をもっているところは多少矛盾のようにも見える。しかし、ここである「文明」は近代的・西洋的な文明であり、「かれら」の「風俗」は中国的・「満洲」的、あるいは前近代的・非西洋的な「野蛮」として対置された「余」の認識によると考えられる。

このような二項対立的な異国の自然と文化に対する描き方が貫かれているとしたら、それは、ヨーロッパの「探検家」「旅行家」たちがアフリカや新大陸アメリカ、アジアを体験した旅行記などでも見られる表現方法と類似しているとすれば、「余」のまなざしは「帝国のまなざし」ともいうべきものかも知れない。しかし、このテキストでいきなり帝国云々というのはいささか唐突かも知れない。ただそもそも何かを「見る」という行為は根本的に受動的な行為ではありえず、能動的に解釈し、やがては攻撃的に占有・搾取する前段階であるとすれば、旅行者の「余」のまなざしは、ヨーロッパ人でも、帝国日本人でもないにもかかわらず、「帝国的」なものとならざるを得ないといえる。それに「余」が医師であり、近代的エリートであることも見逃してはならない。「風俗」を調べることは植民地化の政策に沿うものとして、官学アカデミー、つまり植民地人類学・医学が帝国の政策に迎合する典型として指摘できる。東アジアの近代化過程において、「近代性」と「帝国主義」はコインの裏表のように決して離すことのできない関係なのではなからうか。



「帝国のまなざし」の一例として、「満洲」の図書館に勤めながら、数多くの人文地理学研究成果を残したライブラリアン、田口稔の『満洲風土』（一九四二年）を参考にしよう。田口はその「序」で「この国（『満洲国』）は相異なる四周の風土形態の巧みに複合せられた地域であり、その意味に於て東亜大陸の内でも一つの典型的な中心区を成していると謂へやう」と述べていて、「風土の変化・発達・構成」といった項目で次のように語っている。

地表の上に生起する諸現象は人類の意思によつて刻々に変化しつゝある。満洲の国土を支配する民族が、その国土開発の計画に於て動員する頭脳の広さと深さに基いて風土の面貌が如何様にも進化を遂げるのである。今、此の国は汎ゆる部門に対して衆知を動員して科学的なメスが国の隅々に至るまで加へられつゝある。（七九―八〇年）

この『満洲風土』では「満洲」の大地、気候、植物、動物、人類を「風土の基底」とし、村落と都会、食衣と民具、産業、歴史、美術、民間信仰、風土病、文学を「風土のあり方」として、フィールド・ワークの調査結果をまとめて概観している。しかし、ここで捉えられている「満洲」は現前する自然としての土地ではなく、「思想」としての「満洲」であることは一目瞭然である。というのは、右の引用で確認できるようにそこは様々な欲望が投影された開発対象としての「国土」、調査し、領有する「風土」だからである。とりわけ、そこに「科学的なメス」

を入れるのは、田口の研究成果のように「日本人」の役目である以上、この引用にも「帝国のまなざし」があらさまに感じられる。そして、このような「帝国のまなざし」に基づく近代的学問体系は、やがては和辻哲郎『風土』（一九三五年）に至つて自然・文化・人「民族」が一致するものとして捉えられる方向に向かうことはよく知られていよう。

もちろん、「余」の仕事がこのような帝国の仕事と直接関係があつたかどうかは「赤い山」のテクストからは確認できないが、朝鮮人でありながらも、「帝国のまなざし」を共有していたことは否定できない。

## （2）「満洲」の制度——衛生問題

帝国主義の欲望の対象としての「満洲」に対して、調査の上に何が政策として実行されようとしているのかを検討してみよう。その場合、注目されるのが、特に語り手「余」の職業にかかわる医療・衛生問題に対する記述であり、それに該当する箇所が表の④⑤になる。【引用1】の内容は一見、何の問題もない「科学的」で「客観的」な事実のように見える。しかし、「かれら」の間に蔓延っている「病氣」が一体どういうものかを当時の文献から確認すると問題は変わってくる。もう一回、田口稔『満洲風土』から「風土病」の項目を参考にしよう。

広い国土と雑多な人種をもつ満洲は、その生活の程度の低さや衛生知識の欠乏其他が原因して多くの地方病が発生する。謂はゞ此の国の風土が条件となつて、特定地域に、

他の文明国にはあまり見受けない諸種の疾病が発生するのである。吾人は滿洲の地方病として全滿にあまねく淫浸してゐるアミーバ赤痢、発疹チフスや及び滿洲チフスや、所々に其の常住地のあるペストや、更にマラリヤ、再帰熱、カラ・アザール、地方病性甲状腺腫、克山病、カシンベック氏病、波状熱、水に因る地方病性皮膚炎等を挙げる事が出来るのである。茲には我々日本人として比較的珍しく思はれる二三の地方病に就て稗田憲太郎氏及久保久雄氏の解説を援用して、その風土と生活と疾病との關係を覗いて。  
（五九―六〇頁）

⑤の具体的な「病氣」の「調査」結果が参考資料の傍線部のような内容になるだろう。このような「滿洲」地域の病氣は、ただの病名として羅列されるのではなく、「此の国の風土が条件となつて、特定地域に、他の文明国にはあまり見受けない諸種の疾病」とあるように「非・未文明」の病氣として位置づけられていることが分かる。その結果、「かれら」の間にはびこっている「病氣」の名の羅列が「文明の洗礼」を受けていない「かれら」の非文明の過程を示唆することとなる。

ところが、右に引用した「風土病」の項目は、田口自身の調査結果によるのではなく、稗田憲太郎「滿洲ニ於ケル地方病ニ就テ」を基にした資料であると明記されている。稗田憲太郎は「滿洲」の医学界の主要メンバーで、フィールド・ワークを中心に「滿洲」の医療・衛生制度の基礎を作り上げた人物である。元台灣總督府民政官長で、初代滿鉄總裁であつた後藤新平

とも縁が深かつた。後藤新平は「有効な植民地支配のための医療」という考え方で、台灣の近代的植民地体制の生成期に活躍していたことは知られている。今でいう「開拓医学」「帝国医療」を「滿洲」で確立した人物である。

「帝国医療」の定義は奥野克己の言葉を参考にすると「帝国医療とは、植民地の経営を守りその存続をはかる重要な政治ツールとして、宗主国によつて植民地に導入・実践された近代医療のこと<sup>⑥</sup>」である。もちろん、「帝国医療」は日本だけのことではなく、その背景にはヨーロッパの帝国とその植民地の間においてすでに成立していた医療制度であつた。そのヨーロッパの制度は「科学」に基づく「近代医学」として日本に受容され、それとほぼ同時に台灣・朝鮮・関東州といった植民地に導入・実践された。奥野の「ヨーロッパという一地方で行われていた実践であつた近代医療が、地球上に広く拡散するようになったのは、ヨーロッパ列強が軍勢力を後盾として競い合うようになった帝国主義の時代である」（二一〇―六六頁、三頁）という指摘はいろんなことを示唆する。

ところが、ここでもう一つ提起できる問題がある。それはなぜ日本の植民主義者、帝国主義者でもない「余」の語りから「帝国のまなざし」が読み取れるのかということである。そこでまず、二節でも言及したように、そのまなざしの見る／見られるという構造が権力構造としての「近代的エリート」の「無知な百姓」に対して働く「文明的優越」があげられる。しかし、一方ではそれだけではなく、日本帝国主義による民族ヒエラルキー構造をもあげられる。つまり、「余」のまなざしは、当時

「満洲」で日本人が一等国民、朝鮮人が二等国民、中国人が三等国民と定義されていたことにも関係することを指摘できる。

その差別は徹底していたとみえ、配給される食料や労賃などに差を付けていた。このような差別は、最初は植民者側が作り上げたものに過ぎなかったかも知れないが、ここで見られるのは「優等」な位置を占めた「余」が「劣等」な「かれら」を「病氣」から救うという、「二等国民」の「三等国民」に対する差別として、被植民者自身が内面化した植民者の論理ともなっていたという現実でもある。朝鮮（人）が「満洲」を他者化し、劣等視するのは、植民地内部において被差別民族の間にはびこっていく差別を通じて、日本と朝鮮の文明／野蛮の構図を複製利用し、日本の位置に近づこうとする欲望の表れであり、またそれは同時に朝鮮の知的エリートが「東亜共同体」では「臣民」として主体を獲得しようとする欲望でもあるだろう。

そのような植民地内部の論理は知／非知の間で実現されているだけではない。この小説には別の論理が小説世界の構造を規制している。それは移動／定住に認められるものである。前述したような近代的制度と概念に基づく優劣意識は、人に関する描写でより特徴的に表れるので続いて考察してみよう。その際、そこでもまた「帝国のまなざし」が貫かれているのかどうかにも注意を払うべきだろう。

### （3）「満洲」の人々——旅行者と定住者

「赤い山」の登場人物は大きく分けると旅行者と定住者に分類でき、定住者はさらに「満洲国人」と朝鮮人移住者とに分けら

れる。「余」は旅行者で、「村人たち」は定住者・朝鮮人移住者である。

このように規定したところで、何よりも先に確認しておかなければならないことは、「赤い山」の初版テキストでは、地理的空間は「満洲」、住民は「中国人」として記されていたのが、その後のテキストになると、「満洲」と「満洲国人」に書き直されているということである。「満洲国」建国は一九三二年三月一日であり、このテキストが発表されたのは翌月の四月一日であったことが背景に考えられる。そのために、テキストの初版型には「満洲国」は反映されていなかった。しかし、いつの時点からかは定かでないが、後の『金東仁短篇選』（博文館、一九三九年）版を見ても「中国人」はすべて「満洲国人」に書き直されている。ということは、金東仁は執筆の時点では「満洲国」ではなく、「満洲」という地域とそこに住む「中国人」を描いたことになる。このようなテキストの状況からするならば、テキストの時間的背景も「満洲国」に縛られず、それ以前に遡ることができる。そこで、やがて改められることになる「中国人」に関する記述を取り上げると表の⑪⑫が認められる。

見て分かれるとおり、「赤い山」には「中国人」が直接に描かれることはない。ただ「山猫」の素性を描写するとき「となり村の満洲人たちの賭場にでかけ」（九三頁）たというところ、それに⑪⑫の「地主」としての間接的登場がすべてである。

宋兪知という老人が、その年の収穫を口バに積んで、満

州国人の地主のいる村にいった。しかし帰りには死骸になつていた。できがよいくないというので殴打され、骨をへし折られた宋愈知は、ロバの背にからだをくくりつけられて、ようやく××村に帰りついたのであった。

前の引用文で宋愈知に小作料を要求し、また宋愈知を殴り殺してはロバに括りつけて返したのはすべて「中国人」の「地主」の行動である。この僅かな描写から読み取れる「中国人」は理性やことばによる説得性を欠いた凶暴で野蛮な他者であることは興味深い。それも個人としてではなく、「中国人」という集団として、その群れが理解不可能な完全他者として描かれているのである。前に述べた優越意識の構造はむしろほとんど描写されないところ、個人としての人格の不在することによってより強烈に際立つと考えられる。これもまたヨーロッパが「オリエント」を表象するときに用いられた集の表現方法と同様ではあるが、だからといって、その描写をただちに「帝国主義的」なものとするのは不当であろう。なぜなら、異人に対するこのような他者化は、信仰レベルの表現として、怪奇・怪異表象にすでに見られていたもので、「帝国主義」以前からあったと考えられるからである。

「中国人」に対する描写に比べて、語り手「余」はもちろん、朝鮮人農民に関する説明は比較的に具体性があつて、情報量としても断然多い。語り手に対する考察はすでに二節で行つたので、ここでは、旅行者としての「余」の関連個所をおとして「満洲」の旅行事情をみると、表の①⑥⑦⑩の箇所がそれ

に当たるだろう。

鄭惠英は先行研究(二〇〇〇年)で「物語の背後に万宝山事件があること」を指摘し、当時の政治的状況(満洲事変)からすると、朝鮮人の一人旅は難しかったと断言している。が、テクストの成立状況と合わせてみると、前にも述べたように、この物語の時間的背景を「満洲国」建国直前に限定する必要はなく、そうすると「余」の「満洲」旅行の事情も変わってくる。

実際、一九三二年五月七日付「東亜日報」には「朝鮮人学生の満洲修学旅行」の小見出しがあるし、一九三二年二月二四日には「世医専慰問使行 昨夜、満洲へ出発 医師一人に看護婦二人 約一ヶ月の予定で」とあつて、満洲事変勃発後の緊迫した状況でも医療関係者は少人数であつても、動いていたことが、この後者から確認できる。そこで問題になるのは、鄭の指摘のような政治的背景ではなく、むしろリサーチ旅行の動機や目的とその結果であろう。表の【引用1】の旅行には近代国家の形成と植民地主義、帝国主義との絡み合いで生じた植民地近代化の問題が潜んであり、その背景と「赤い山」での「余」の旅行を結び付けるのは、まさに日本帝国主義の植民地政策を担う近代的エリートとしての朝鮮知識人という存在そのものにあるということである。

本稿がこの小説で「余」の存在のありかたにこだわるのは、彼のまなざしが「満洲」の地に移動・定住した同じ民族朝鮮人をどう見つめているのかにある。そこにすでに予告しておいた「余」のまなざしの変化が認められるからである。そこで次には、朝鮮人移民者に関する個所をみよう。表の⑧⑫⑬の内容は

多少の虚構があるにしても、当時の「満洲」における朝鮮移民の状況がある程度反映している。一九世紀末から始まった朝鮮人の「満洲」移住は、日韓併合以降はさらに加速し、一九三一年の統計で六三〇、九八二名、漢・滿族の次に多い数であった。日本植民地当局による「満洲」への朝鮮人の強制「集団移民」政策が始まるのは一九三七年以後のことだが、居住形態としては、それ以前の「自由移民」時期にも朝鮮の農民たちは中国人村からは離れたところで集落を作って生活していたことは事実である。一九三〇年代初の、日本外務省亜細亜局で調査した朝鮮人の「満洲」移住動機をみると、経済的にはA「満洲」が朝鮮に比べて暮らしやすかった点、B朝鮮の人口過剰、C「間島条約」によって朝鮮人も土地の所有ができた点、D朝鮮での頻繁な凶作、E朝鮮内の耕地減少と地価の急騰、F「満洲」では農業が有望であるという噂に刺激された点、G鉄道開通により交通が便利になった点などが指摘できるが、さらに政治・社会的にはH日韓併合を前後に朝鮮人の日本に対する不平が深化した点、I中国官民が朝鮮人に対して同情していた点、J「満洲」を避難所として認識する社会的風潮などがあったことも指摘できる。

ところで、⑮⑯⑰⑱の内容になると今までの「余」の見てきた「満洲」表象とは違うものが見えてくる。すなわち、野蠻／文明の対立構図のなかで、常に下位の「野蠻」に「満洲」「中国人」が位置していたにもかかわらず、この小説のみならず現実にも「かれら」が「地主」で、「余」の属している朝鮮人側はむしろ「故郷を離れた万里の異郷」で「虐待を受ける」「小

作人」として階層的に逆転していたのである。この現実と想念のズレに対して、「余」のまなざしに大きな矛盾が表われるようになる。前にも述べたように、「余」は「村人」たちと「同族」でありながらも「虐待を受けるひとびと」に対して同情するだけで、アイデンティファイはせずにあくまでも一定の距離を取っていた。それというのも、「余」は「帝国のまなざし」を獲得した植民地の「近代的エリート」であって、朝鮮人より日本人に近い存在であるという無意識の意識がそのまなざしを規制していたのだが、それが朝鮮人移民者たちがどんなに「ひとびとが比較的温良で正直であり、年のいったひとたちは、それでも千字文の一巻ぐらいは読んだひとたち」（八七頁）であるとしても、結局は他国に移住してきた移民者、「中国人」の「小作人」で、権力的な弱者であることを現実に見つめざるを得なくなったからである。ここにおいて「余」は「帝国のまなざし」を有しながらも、同族を「受難の朝鮮人」として描かざるを得なくなる。そのまなざしの変化のなかで「山猫」の行為が捉えられていくことに注意すべきなのではなからうか。つまり、それまで移住朝鮮人にアイデンティファイするのを無意識的に拒否していた「余」が現実を直視する過程で自己の民族性に気づいていく。そのまなざしの変容が「山猫」の行為への注視のなかで獲得されていくが、それがこの小説のまなざしの構造なのである。

あらためて「余」のまなざしの変化という観点からこの小説を捉え返すとすれば、次のようにならう。「赤い山」における「満洲」は、語り手「余」の「科学的」「客観的」「理性的」だ

が、「近代的」「帝國的」「制限的」なまなざしによって捉えられたものであることが明らかになった。しかし、最後に見た朝鮮人移民者と「中国人」の關係においては「帝國のまなざし」の權威では語りきれないネジレが見られるようになる。そこにこの小説のドラマが成立するのだが、その背景はどうなるのだろうか。朝鮮人が「小作人」であったことは事実だとしても、「満洲」で「虐待を受けた」ということはただの「事実」なのだろうか。これについては次節で具体的に検討しよう。

#### 四、朝鮮における「満洲」

一九二六年十一月三日付『東亜日報』五面には「中国人惡地主 農具で同胞殺害」という見出しで左のような記事が掲載されている。

無理な小作料を要求したあげく、農具で殴り殺してしまい鳳凰城で中国人地主に殴られた李錫喜（二五）の真相を日本領事館で調査中だということは任意報道（十一月一日二面）したとおりである。前記の李錫喜は慶北豊基郡初現面の者で、今年の春から鳳凰城に移住した。王道世溝に住む中国人地主夏俊山の土地を小作することになり、收穫の半分を分けると契約した。しかし、秋収を終えてから、「（中国人地主は）以前の契約は無効と主張し、また收穫の七割を強要してきた。強弱の不動は仕方ないことで、彼（李錫喜）も応諾したが、多少の口論になり、夏俊山とその家族

が襲いかかって農具でそのように殴打したのである。李錫喜は安東県泰誠堂医院に入院し、治療中だったが、あまりにも酷く殴打されたので、回復できず、去る二十九日午後六時頃、とうとう絶命してしまったそうだ。（新義主）

李錫喜という朝鮮人小作人が鳳凰城で中国人地主の夏俊山に殴り殺されたという内容のこの記事は十一月一日付と三日付、二回にわたって報道され、新聞記者と購読者の関心を引いていたことが分かる。興味深いことはこの記事の内容が金東仁「赤い山」のなかで語られている事件と酷似していることである。ただ新聞記事のほうでは「山猫」たる人物や語り手「余」たる人物は登場しないが、朝鮮人農民が中国人地主の下で小作をしていて、小作料の問題でトラブルになり、あげく朝鮮人農民が中国人地主にリンチされて殺されたという事件の搾取／被搾取の關係及びそのストーリー性はまるで一緒ではないか。

この記事の背景をさらに探してみると、次の資料が参考になる。すなわち、一九二四年七月号『開闢』（第四九号）に掲載された入生「南満をいつてきて」という紀行文には「南満は近來、我が同胞の少なくない企望を引起す地方である。私は五年前に一度そこを遊歴したことがある」と始まっている。そこには朝鮮人にとって「希望の地」としての「満洲」が認められる。このような朝鮮人と「満洲」との結びつきについて近年の研究は見逃してはいない。たとえば、「満洲」における朝鮮人移民問題研究で確認できるので参考にしよう。

満洲は生産関係の矛盾及び再生不足に苦しめられた清朝には「突破口」であり、貧しい人々には新しい希望を与える「機會の大地」でもあった。満洲は特に「満洲国」樹立以後、日本では実現できなかったことを求めるか、日本で暮らせない人々にも「メシアの大地」であった。（中略）朝鮮でも韓日併合を前後し、義兵活動をして追われる身になって、また、植民地の現実を打開するための代案を探して、朝鮮總督府の「自作農創定」や移民政策に便乗して、あるいは一攫千金の夢を追求めて、大勢の人々が満洲に渡った。彼らにおいても満洲は暗鬱な現実から逃れられる突破口でもあり、新しい人生を開いてくれる希望の地でもあったのである。

一九二〇年代前半までは、日本人ばかりではなく、朝鮮においても「満洲」は「希望の地」「機會の大地」であって、実際、貧窮した朝鮮の農民たちが希望を抱いて「満洲」へ流れていったことがうかがえる。ただそれにもかかわらず、金東仁「赤い山」を始めとする「満洲」を舞台とするほとんどの朝鮮文学において、「満洲」は「受難の場」として描かれているのである。それは不思議なことであるかもしれないが、また自然でもあろう。しかも、金東仁は「満洲」には行ったこともないのに、そのことが描けたということは、人間と土地の関係のありかたを知っていて、さらに様々なメディアからの情報を得ていたことになる。

そこで「中国人」と「地主」をキーワードに『東亜日報』を

検索してみたところ、この節最初に挙げた記事と類似した新聞記事、すなわち中国人地主と朝鮮人小作人の間のトラブルで朝鮮人農民が虐待されるパターンの事件が十六件検索しえた。その最初の記事が一九二六年十一月一日の右記の事件である。同じキーワードで『朝鮮日報』を検索すると、違う事件も入れてやはり十六件の検索結果が出た。これはあくまでも「中国人」と「地主」をキーワードにした検索結果であって、他にも類似したパターンの記事はあり得る。とするならば、この事実は何を意味するのであるうか。新聞が「事実」を伝達することを信用すれば、それほど「満洲」では類似した事件が多く起こっていること、その事件の被害者の多くが朝鮮人農民たちで、理想に反して彼らが移住して暮らすことが困難であったということになるだろう。それにしても、ここまでパターン化して繰り返された事件を、何の原因分析や解決策の追究もないまま、繰り返す事実のみを報道することにはどうしても異様に思われる。

そこに何らかの日本帝国と中国軍閥政府との間の政治的対立を想定すべきなのではなからうか。そうでなければ、この「異様」さは理解できないと思われる。一九三一年七月二日に長春郊外の万宝山地域で朝鮮人農民と中国人農民との大規模な衝突事件が朝鮮と日本の新聞第一面に大々的に報道された。それに扇動されて朝鮮内では在韓華僑襲撃事件まで起こる。いわゆる「万宝山事件」といわれるこの一連の騒動は、朴永錫の研究で明らかになっているとおり、実際の死傷者はひとりもないにもかかわらず、記事は緊迫した雰囲気を出すために誇張され、虚偽の情報まで書かれていたとされる。朴の論によれば、その虚

偽情報は在長春日本大使館から『朝鮮日報』長春支局長であった金利三に提供されたものであったことである。このような事実からみて、後の満洲事変勃発の発端になるこの「万宝山事件」は偶然起こった単発的な衝突ではなく、「満洲」を巡る中国と日本の支配権争奪の一触即発の緊張した状況下で「満洲」に住む日本臣民、つまり朝鮮人農民を保護するという口実の元、軍事力を強化しようとした日本帝国主義のメディア戦略の一例であつたと分析されている。

もちろんその背景には東洋拓殖株式会社を前面に立てて強行されていった植民地農村の経営と農地収奪、日本の貧困農民の朝鮮移住、農地を奪われた朝鮮農民たちの土地離脱と「満洲」行きなどといった連鎖的な移動があつたのだが、「公」の新聞メディアでそのようなことを取り上げるはずはない。もっぱら「満洲」で迫害される朝鮮人と朝鮮人を虐待する中国人というような言説が流通していたからこそ「万宝山事件」とそれに続く在韓華僑襲撃事件までが起こり得たのではないか。帝国主義の植民地拡大は、このようにすでに植民地化した人間を新たに見込まれる「国土」に送り込んで、被支配者同士に抗争を起こさせ、その調停というかたちで支配権を拡大していった。「万宝山事件」とこの小説のインターテクスチュアリティ問題のレベルを考えるよりも、むしろこの両者が日本帝国主義の植民地拡大の政策という政治的コンテクストを共通の背景と考慮すべきなのではなからうか。

この小説と時代背景に焦点をしばって再説するならば、「万宝山事件」に代表される、日本帝国の「拡張主義」「大陸侵略」

のためのメディア戦略の延長線上で、「中国人地主」と「朝鮮人小作人」の闘争の物語が産み出されたといふべきだろう。その結果、金東仁「赤い山」は、作家の意図とは別に、そのような帝国拡張のための言説を再生産するものとして「政治的に」位置づけることができる。

## 五、結び

金東仁「赤い山」は作家の文学的実験と芸術的な営みの産物である。しかし作家は敢えて語り手の限界「視点的制約」を可視化し、また敢えて歴史的・政治的事件を題材に、民族主義的な記号を散りばめた小説を書いた。そこには作家的戦略による文学的な試みがあつたのかも知れない。もし、作家に積極的な政治的意図があつたとしたら、今までいわれているとおり「亡国の民」の悲しみと憤慨であろう。それはテキスト最後の「愛国歌」の場面に良く表れている。

一方、「赤い山」に隠されているのは語り手「余」の限界性と〈読み〉の転覆可能性や余白だけでもなく、「余」の「帝国のまなざし」だけでもない。以上でみたとおり、小説の背景には繰り返して記事化される現実の「事件」があり、またその「事件」と「記事」の裏側には帝国の戦略があつたのであり、「民族主義」的な言説が「帝国主義」的なそれに吸収されていく過程も確認できる。そのような意味で金東仁「赤い山」は一九二〇年代から始まり、「万宝山事件」で頂点に達した、朝鮮におけるある種の「満洲」言説の始まりなのである。



\*本文引用は長璋吉訳『金東仁短編集』（高麗書林、一九七五年）版を用いた。

\*先行研究と新聞記事は拙訳による。

## 注

- (1) 「赤い山」は日本語訳が二回出ていて、申建訳編『朝鮮小説代表作集』（教材社、一九四〇年）には「緒い山」で、長璋吉訳『金東仁短編集』（高麗書林、一九七五年）には「赤い山」で収録されている。
- (2) 一九九〇年から一九九五年までの第六次教育課程と一九九六年から二〇〇二年の第七次教育課程の教科書出版『文学』に全文が、その他、中学校国定『国語』教科書に一部が抜粋掲載されている。
- (3) 「千里」一九二九年六月二日創刊の大衆雑誌（一九四二年）編集人・発行人は金東煥、趣味中心の娯楽雑誌だったが、低俗ではなく、当時開闢社から発行していた『別乾坤』と共に大衆紙の二代山脈であった。創刊号の原稿検閲記録だけを見てもこの雑誌の水準が伺われる。つまり、韓龍雲「あなたの追憶」、朱耀翰「世界の巨人、莊介石」、宋鍾禹「世界へ向けて」、薛義植「印度詩聖、タゴール会見記」などが押収されその他にも「民族文学と無産階級の合致点と差異点」という題下の文章はすべて掲載不可になった。このような日本帝国の過酷な検閲の下で、度重なる原稿押収と削除の受難を受けながら、次第に現実と妥協して一九四二年一月一日第三巻第一号（通巻一五二号）発行後は暫く廃刊になるが、一九四二年五月一日からは「大東亜」と改題し、露骨な親日雑誌と転落する。
- (4) 現在、韓国の国歌である「愛国歌」の冒頭。国歌に指定されるのは大韓民国が樹立した一九四八年八月一日である。
- (5) [http://cafe.naver.com/ssg167.cafe/frame\\_url=ArticleRead.nhn&ArticleId=170](http://cafe.naver.com/ssg167.cafe/frame_url=ArticleRead.nhn&ArticleId=170)
- (6) 鄭在苑「金東仁文学における「余」の意味」『サンホ学報』第七集、二〇〇一年八月
- (7) 金東仁は作中人物の呼び方において「he, she」を「彼」に通称し、

また、過去時制を導入して文章の時間的観念を意識的に明白にした。そして、簡潔で短い文章、いわゆる「簡潔体」を形成した。一九五五年に出版社「思想界」が設立した「東仁文学賞」は、一九七九年からは朝鮮日報社が選考、授賞している。金東仁の代表作には「ベタラギ」（一九二二年）、「甘藷」（一九二五年）、「狂笑ソナタ」（一九三〇年）、「足の指が似ている」（一九三三年）がある。小説以外に評論にも優れていたが、特に「春園研究」は力作であると考えられている。

- (8) 鄭惠英「金東仁「赤い山」と万宝山事件——一九三〇年代の小説に現れた満州——」筑波大学比較・理論文学会『文学研究論集』第一八号、二〇〇〇年六月

- (9) 「千里全体会議」の三つのテーマのうち一つとして「新満洲国と吾人の態度」に元世勲「満洲新国家観」と朴流「新満洲国と吾人」が載っている。

- (10) ヨ・インソク、バク・ユンジュ、バク・ヒョンウ「韓国医師免許制度の定着過程——韓末と日帝時代を中心に」『医師学』第二二巻第二号、二〇〇二年、参考

- (11) 李大授「金東仁の短編集『ジャガイモ』『赤い山』の解釈」（『国語教育』Vol.73、一九九一年）

- (12) 金九中「読書を通じるテクストの転覆——金東仁「赤い山」「礎石」を中心に」（『韓国文学理論と批評』第二集、一九九八年五月）

- (13) 田口稔の経歴や主要著書は西原和海『満洲の図書館とライブラリアン田口稔への接近』（『朱夏』一二号、せらび書房、一九九九年四月）で確認できる。

- (14) 田口稔「序」満鉄弘報課編『満洲風土』中央公論、一九四二年、一頁
- (15) 小島麗逸「若林まさみと稗田憲太郎」『朝日ジャーナル』第一四巻第二号、一九七二年二月八六頁

- (16) 奥野克己「帝国医療と人類学」春風社、二〇〇六、六頁

- (17) 「等は日本人、二等は朝鮮人、三等は漢・満人と区別し、配給の食糧も日本人には白米、朝鮮人には白米と高粱半分ずつ、中国人には高粱と日本人に同差を付けた」。山室信一「キメラ——満洲国の肖像 増補版」（中公新書、二〇〇四年）「公務員の給与は、内地より外地のほうが高く、学歴は大学卒と小学校卒では初任給でも10

倍くらいの差があった。満鉄はかなり給与水準の高い会社だった  
が、中国人の給料は日本人の3分の1以下だったとの事。これは大  
よその話である。郷一成「父の15年戦争(6) 張作霖を爆殺した  
男」(インターネット資料、二〇〇六年四月三日、日掲載、  
<http://www.news.janjan.jp/living/0604/0604283515/1.php>)、二〇〇七  
年一〇月二四日確認

- (18) 「五族協和」を謳った日本は在満朝鮮人を二等国民とし、三等国民  
である漢族らと食糧の配給や労賃などに差を付けて民族紛争を起こ  
させ、それを日本の侵略政策に巧みに反映した」という見解もある。  
戸田郁子「中国朝鮮族」(インターネット資料、<http://www.areum.org/home/reference/toda.html>)、二〇〇七年一〇月二四日確認

- (19) 『東亜日報』一九三二年五月七日、二面  
(20) 『東亜日報』一九三二年二月二四日、二面

- (21) 日本外務省亜細亜局編『在満朝鮮人概況』一九三三年、一頁

- (22) 朝鮮国境に近い安東省の安東市に隣接している。

- (23) ホン・ワンピョ、ユン・フィタク「朝鮮人の満洲農業移民と東アジア  
の民族関係研究」『韓京大学校論文集』第三六号、二〇〇四年、二二  
七六頁

- (24) 期間設定は『東亜日報』が創刊された一九二〇年四月一日から「赤い  
山」が発表される直前の一九三三年三月二二日にした。

- (25) 朴永錫「万宝山事件研究」亜細亜文化社、一九七八年

## ▲参考文献▲

- 李 大揆『金東仁の短編小説「ジャガイモ」「赤い山」の解釈』『国語教育』

Vol.73、一九九一年

- 奥野克己『帝国医療と人類学』春風社、二〇〇六年

- 金 九中「読書を通じるテクストの転覆」金東仁「赤い山」「礎石」を中心  
に」『韓国文学理論と批評』第二集、一九九八年五月

- 金 東仁「赤い山——ある医師の手記——」「三千里」第二七号、一九三三  
年四月

「赤い山——ある医師の手記——」申建沢編『朝鮮小説代表作集』教  
材社、一九四〇年

「赤い山——ある医師の手記——」長璋吉訳『金東仁短編集』高麗  
書林、一九七五年

小島麗逸「若林まさと神田憲太郎」『朝日ジャーナル』第四卷第一号、  
一九七二年二月

入人生「南満をいってきて」『開闢』第四九号、一九二四年七月

田口 稔「序」満鉄弘報課編『満洲風土』中央公論、一九四二年

鄭 在宛「金東仁文学における「余」の意味」『サンホ学報』第七集、二〇  
〇一年八月

鄭 惠英「金東仁「赤い山」と万宝山事件——一九三〇年代の小説に現れ  
た満洲——」筑波大学比較・理論文学会「文学研究論集」第一八  
号、二〇〇〇年六月

戸田郁子「中国朝鮮族」<http://www.areum.org/home/reference/toda.html>  
東亜日報社「朝鮮人学生の満洲修学旅行」『東亜日報』一九三二年五月七日、  
三頁

「世医専慰問使行 昨夜、満洲へ出発」『東亜日報』一九三二年二  
月二四日、二面

「中国人悪地主 農具で同胞殺殺」『東亜日報』一九二六年十一月  
三日、五面

西原和海『満洲の図書館とライブラリアン 田口稔への接近』『朱夏』No.12、  
せらび書房、一九九九年四月

朴 永錫「万宝山事件研究」亜細亜文化社、一九七八年

ホン・ワンピョ、ユン・フィタク「朝鮮人の満洲農業移民と東アジアの民族  
関係研究」『韓京大学校論文集』第三六号、二〇〇四年、二二

ヨ・インソク、バク・ユンジェ、バク・ヒョンウ「韓国医師免許制度の定着  
過程——韓末と日帝時代を中心に」『医師学』第一一巻第二号、  
二〇〇二年

(ユ スジョン 筑波大学大学院博士課程

人文社会科学研究所 総合文学)